

発行人：加藤 栄護 編集長：外岡 明 事務局長：吉田 博行
事務局：〒153-0053 目黒区五本木2-47-5 Tel 03-3713-2096

—1—

稲門祭2005、盛大に開催される

10月23日(日)、2005稲門祭が開催されました。東京都23区支部では、本年も大隈庭園の園遊会に参加いたしました。

各区稲門会では、江戸前寿司、銘酒試飲、おでん、餅、焼ソバ、焼肉、焼鳥、名産品販売、福袋、似顔絵書きと、各区趣向を凝らした出店が、今迄以上に多く並びました。当日は学生団体「環境ロドリゲス」がゴミの分別指導をして下さいました。感謝します。

また本年は神奈川県支部も、シウマイ、カマボコ、鳩サブレの名産品を販売され、23区とご一緒に、大隈庭園を賑わして下さいました。

そして暑い位の晴天の下、大隈庭園のステージでは、23区より出して下さった、ジャズバンド、若い女性会員さんのマジックショー、更に交友OBバンドの「モダンジャズ研究会」の演奏に、庭園一同、うっとり聞きはれたとの感想まで頂きました。

更に、学生さんのフラダンス(研究会)に若さを大いに頂き、ちんどん研究会の和服姿に、楽しさと可愛さが庭園いっぱいに広がりました。



最後は恒例の応援部バレーと校歌斉唱、校旗を先頭にチアリーダース、プラスバンドと、待ちに待った応援部バレーの入場です。応援曲メドレー、ひかる青雲、紺碧の空と、学生時代神宮球場で早慶戦にいらした頃を、懐しく思い出された先輩方も多くいらっしたことでしょう。そして校歌斉唱、大隈庭園で歌った「都の西北」早稲田の杜に高らかに響きわたりました。

東京23区支部大会

平成18年3月20日(水) 大隈講堂にて開催予定
23区支部担当 大竹一子

会員の消息

○新入会員

川井信義氏	昭和32年 政経
	趣味 スポーツ観戦・ウォーキング
中村知明氏	昭和40年 法
	趣味 麻雀
芦沢謙次氏	昭和55年 文
	趣味 食い道楽・着道楽・呑み道楽

リレー随筆

コピーライター20年、そして・・・

岩崎正夫(昭和47年・商)

「白いクラウン」by 梶 祐輔氏

戦後クラウンは「黒塗り社用車」ではあったが、個人向けではなかった。昭和30年代半ば「ファミリー層にもクラウンを売りたい」トヨタのために、梶祐輔氏(一文卒)は名コピー「白いクラウン」を作った。「もはや戦後ではない」と軌を一にしていた。「広告が時代をリードする」私は小学生ながら、コピーの威力を新聞から感じた。

「金曜日は、ワインを買う日」by 加藤英夫氏

早稲田では広告研究会に入った。2年先輩に加藤英夫氏(昭和45年商卒)がいた。サントリー入社2年目に会社がワイン参入。日本でも土曜週末を楽しむ余裕がでてきた。そこで彼は「金曜日はワインを買う日」と書き、コピー新人賞に。私は「あ、コピーなんて簡単だ」と錯覚。浅はかにも広告の世界に飛び込んでしまった。

「コンピュータ。むしろ素人の方々に」

30歳代前半、梶氏率いる日本デザインセンターでコピーを書いていた。画家・横尾忠則氏、詩人・高橋睦郎氏(一文卒)がかつて在籍、1964年東京オリンピックのデザイン表現を仕切った会社だ。あるとき、ベンチャー企業「ソード」のコピー依頼が舞い込んできた。日経新聞シリーズ広告だ。当時ソードは画期的なソフトを開発に成功、BASIC言語を知らなくても扱えるという。そこで「コンピュータ。むしろ素人の方々に」コンピュータ普及を願って書いた。しかし私の非力ゆえ、自動車やワインのように消費者に浸透せず、「ソード」も東芝の子会社になり、今はない。

日本にもサードパーティを

10年前、プレゼンで使ったプリンタの消耗品コストに不満を覚えた。「何でカーボン素材をカートリッジに詰めただけで3~4万円するのだろうか？」そこでプリンタ消耗品・中古PC販売・再生業を始めた。日本はメーカー信仰が強すぎる。欧米ユーザは自己責任で故障を自分で治す。一方日本人は業者任せで、高いコストを払いつづけている。「日本にもサードパーティを」今の私のコピーだ。

幸い目黒稲門会には加藤会長・外岡編集長はじめ、錚々たるIT企業ご出身者がいらっしやる。アドバイスをいただき、社業を発展させていきたいと考えている。

「お月見の茶会」の折に

2005年9月16日

場所：京王プラザホテル



(中上) 美しい四季に恵まれた日本。今日は仲秋の名月を楽しむ“お月見の茶会”ですが、その折々の季節の移ろいをこよなく味わい、愛でる日本人であることを改めて幸せに思います。自然を愛でるという茶道は日本人の美意識の原点でもありますね。

(米澤) “雪月花”という言葉がありますように、四季をこんなにも美しい響きの言葉で表わすことができることも日本人の感性と日本語の素晴しさがあるからだと思います。しかし、日に日に季節感が薄れているのが現代ですし、気ぜわしい日常生活の中ではいつのまにか木や花や吹きゆく風にももの想うという感覚は失われてしまったようです。

(中上) 日本人の心から消えゆく“雪月花”の世界ですが、そんな時代だからこそ、それを茶道で体験できるということは、現代人に残されたチャンスともいえるのではないのでしょうか。米澤先生は、「男の茶会」を催されたり、忙しいビジネスマンにも茶道の心を広めていらっしゃるようですが、受難の時代を生き抜くビジネスマンにとってなぜ茶道が必要なのか、そのあたりを・・・。

(米澤) 現代人、とりわけ男性にもぜひ“茶の湯”の神髄なるものを知っていただきたいものです。茶道は元来、禅宗を背景として成立し、作法や道具よりも精神世界が重んじられてきました。それを総合芸術にまで高め、ひとつの文化として開花させたのが皆様よくご存知の千利休です。血で血を洗う戦国武将らにとって、茶室のみが唯一、

[ゲスト] 米澤喜美子先生

茶道裏千家正教授 茶美の会主宰。
日本橋三越カルチャーサロン、Q.E.D 茶友倶楽部、企業などで茶道指導に携わる。
茶道を通じて国際親善・日本文化の紹介。
茶の湯コーディネーター。

[聞き手] 中上美代子

目黒稲門会幹事(会報編集委員)

気を緩めることができる「癒しの空間」であったことでしょう。

これは、厳しい現代の企業戦士にもあてはまることではないでしょうか。

(中上) ゴルフ、カラオケ、高級クラブ、料亭通い、バブルがはじけると今度は居酒屋でクダを巻く。決して悪いことではないし、理解はできますが、日本男児の悲哀を感じますね。

(米澤) “お茶の心”は一口でいいますと、非日常の世界に入り、風雅の世界に遊ぶことなのです。茶の湯は忙しく悩み多い日々の生活から、タイムスリップして豊かで懐の深い、風雅な日本文化にどっぷりと浸らせてくれます。時空間を超越して移動し、遠い「心の旅路」に入るのです。日常から脱却し、心を別の次元に置く。本来の意味での「癒し」となり、新しい意欲も湧いてきます。非常に厳しい状況にある現代人にこそお勧めしたいものです。

(中上) 揺らぐ心をしっかりと包み込み、自分自身に立ち返る場としても茶道の世界が必要な時代かもしれませんね。

(米澤) 「日本的な美」日本人の美意識とでもいいかもしれません。風土に根ざした四季折々の中にある美しいものを愛し、共有しようとする。心のありかたそのものです。ビジネスは単なる経済行為だけではないはずです。美意識を持って仕事をするとき、多くのヒントを与えてくれます。

また、よく言われます「一期一会」というお茶の言葉は、人様との出会いを、人生のこの今の瞬間を大切にしようという教えです。

(中上) 例えば「エコロジー」などと声高にいわれたり、「もったいない」などという言葉をしり顔で語られる時代ですが、日本人は幾世紀も前から自然そのものを神として、旬のものを食し、季節に寄り添った生活を守り続けてきました。ですから、逆輸入的にこのような言葉を耳にすると、「何を今さら」という思いです。経済を神とする時代だからこそ、茶の湯の中に答えを見い出すことができるような気もいたします。

(米澤) 仕事でもなんでも、組織が潤ったときにはじめて、個人も豊かになります。個人が組織に参加し、そこへ加わった時、各々が幸せになれるものでなければ、恒常的な発展はありません。

「共通した志向を持つ個人の、集合体としての組織」であるために、清涼剤としての一服のお茶。このお茶を飲むことが至福にいたるプロセスを楽しむことになるのではないのでしょうか。

(中上) 何やら、目黒稲門会にもあてはまりそうで・・・。

(米澤) それに、約800年前に、栄西禪師が「喫茶養生記」の中で、「お茶は養生の仙薬なり、延齡の妙術なり」と記しています。
美容と健康にも大変素晴らしい効果があるのですよ。

(中上) お茶を飲むことにかこつけ、幸せの時間を共有するために、自然とともに生きることを旨とする茶道の観点からも、個人と組織の間でサロンの役割があるお茶会をまた楽しませていただきたいと思います。
有難うございました。

各部会からの報告

囲碁部会

定例囲碁部会 12月7日(水) 下目黒住区センター。

忘年囲碁大会とし、各クラス1組4人のハンデ戦で開催します。併せて懇親会をチャンコ時津洋で予定しています。

部会長 保井 正

旅行部会

来年5月の東北旅行を計画します。

- (1) 平泉と水沢を訪ねる2泊3日のバス旅行です。
(5月7日～9日でトイレ付バスを用意)
- (2) 水沢では八幡副会長のご生家を訪ねます。
(八幡さんの家は留守藩の筆頭家老職の家柄です)
- (3) 1泊2日の参加も可能です。
(帰路が新幹線の別行動となります)
- (4) 費用は1人4万5千円位を予定
(30名位の参加が必要です)

部会長 井村正陽

美術・歴史鑑賞部会

第10回美術・歴史鑑賞部会は、9月16日(金)に国立西洋美術館で開催中の「ドレスデン国立美術館展」を訪ねました。

会場には、ザクセン選帝侯アウグストの蒐集した逸品が数多く展示され、その種類の多彩さと数の多さに圧倒されました。またその内容からは、ヨーロッパの王侯貴族の美に対する感性を伺い知ることができ、興味を深めてくれました。

展覧品の鑑賞後、落合桃子氏(早稲田大学大学院美術専攻)のスライドトークを聞いて蒔蓄を深め、終了後には席を「ぎんれい」に移し、フランス料理を味わいながら美術談義を楽しみました。参加者は23名(内ビジター3名)でした。次回は歴史探訪「伊能忠敬」を計画しています。ご期待下さい。



部会長 八幡和三郎

グルメ部会

(1)「ビア・パーティー」

8月29日(月)、品川のホテルパシフィック東京にて、グルメ部主催の「ビア・パーティー」を開催しました。残暑厳しい中、冷たいビールとフレンチの軽食で納涼のひとつときをと、29名が集いました。

加藤榮護会長の乾杯で始まり、ビールの他、ウィスキー、ワイン、焼酎なども頂き、大いに盛り上がりました。また空くじなしの「福引き」タイムもあり、吉田博行事務局長のユーモラスな司会進行に皆さん爆笑となる場面もあり、和気藹々とした楽しい夕べとなりました。

<参加者>

浅海敏之、阿部喜久雄ご夫妻、有山勇次郎、石川智子、井村正陽ご夫妻、海口昭治、大野利幸ご夫妻、海沼美智子、加藤榮護、郡山弘文、島田久家、田畑繁、土川俊雄、外岡明ご夫妻、永井純一郎、服部尚彦ご夫妻、樋口定広、樋口さんご友人、堀井良造、村上満、森家一三、八幡和三郎、渡辺三郎、吉田博行(五十音順、敬称略)

(2)「新そば会」

10月4日(火)と6日(木)の両日、麻布十番の「更科堀井」で毎年恒例の新そば会を開催致しました。そば前菜、松茸そば、そば寿司、そばがき、特製かき揚げの後、新そばのもり・白い更科そば・黒い太打ちそば等、おそばのお代わり自由の食べ放題となり、そば汁粉で締めとなりました。お酒の飲める方には、お店特製のそば湯割り焼酎が好評でした。

参加者は、両日とも18名で延べ人数36名。芦澤哲男ご夫妻、阿部喜久雄ご夫妻、荒瀬修一郎、ご令嬢、有山勇次郎、伊藤源喜、井村正陽ご夫妻、海口昭治、小野満、加藤榮護夫人、海沼美智子(両日)、郡山弘文、櫻井輝隆、島田久家、杉浦良允ご夫妻、杉田則弘、田畑繁、手塚仁雄ご夫妻、外岡明ご夫妻、服部尚彦、藤岡長世ご夫妻、堀井良造(両日)、水野弘文、村上満、森家一三、渡辺明久、渡辺三郎(敬称略)

部会長 海沼美智子

三士会

毎回いろいろな話題に談論風発です。是非ご出席をお待ちしています。



世話人 土川俊雄



新そば会(更科堀井)

ビア・パーティー(パシフィック・ホテル)

ゴルフ部会

10月28日、美浦ゴルフクラブで、17回目となるゴルフ会を開催しました。心配していた天候も快晴となり、多くの方は半袖でプレーを楽しみましたが、大きくうねりの有るグリーンに挺摺る人も多く、上位は、実力者が顔を並べる結果となりました。

優勝は伊藤悠、準優勝庄野耕、3位市瀬達夫の各氏でした。伊藤悠氏は選挙の苦勞から開放され、のびのびとした豪快なショットで、6アンダーの優勝となりました。



参加者

伊藤悠、庄野耕、市瀬達夫、杉山弘、浅海敏之、岡知平、杉浦良允、松岡雅俊、岩佐好恭、木村昭一、三部由夏子、島田久家、保井正、服部尚彦、岩佐幸子、村上満、保井栄子、千野逸平、安居院文男、大野利幸、大野幸子、松尾洋一、伊藤源喜、下村尚久、本田道治、梁瀬陽太郎、加藤榮護、櫻井輝隆(成績順)の28名。

部会長 大野利幸

麻雀部会

土方前部会長のご都合により急遽後任に選任されました若輩者で何分行き届かない箇所がありますが、何卒宜しくご指導の程お願い致します。

8月27日(土)に世田谷稲門会主催の3区連合麻雀大会が渋谷「スリーハンドレッド」で開催されました。参加者は32人(目黒稲門会11人)の盛況で和気藹々とした雰囲気の中4回ゲームを行いました。残念ながら優勝・準優勝は逃しましたが、渋谷・世田谷両区稲門会との交流を一層深め、楽しい半日を過ごすことが出来ました。

次の麻雀大会は第13回3区連合で、目黒主催により11月26日(土)渋谷「スリーハンドレッド」を予定しております。また12月18日(日)には恒例の年末麻雀大会を地元「西小山クラブ」で開催(終了後忘年会)予定ですので、皆様奮ってご参加下さい。

部会長 松尾洋一

カラオケ部会

当部会は、会場を「コートダジュール」カラオケ専門店に移してから漸く軌道に乗り、早や一年を迎え活気が出て来ました。

毎回12名前後のノド自慢が集まり、喉を潤し、談笑の内に何時しかカラオケの申し込用紙が次々とテーブルに置かれ、熱の入った歌声に耳を傾け、刻を楽しんでおります。

先輩、後輩の別なく時間の有る方は、何時でもどうぞ、気軽に覗いてみて下さい。

次回は
12月9日
第2金曜日



部会長 海口昭治

〔空 往 満 帰〕

— 外岡茂十郎の軌跡⑦ —

外 岡 明(26年理工・電)

⑩-2 一つの道に精進するものの強さ

昭和16年、早大野球部に近藤清という選手が入部して来た。近藤は岐阜商時代から遊撃手として、甲子園などで華々しい活躍をした選手であるが、早稲田に入ると先輩捕手の卒業で、遊撃から捕手に廻されたが、昭和17年春には正捕手の地位を確保した。打撃の方も頭角をあらわし、春はベスト・テン二位、秋は四位と信頼のおける打者に成育していった。ファンは目覚ましい近藤の進境に期待をかけていた。昭和18年春、私は久しぶりにグラウンドの練習を見に行った。飛田(穂洲)さんの隣に腰を下して見物していたが、そのうちに、捕手の近藤がいけないことに気がついた。不審に思って飛田さんに聞いてみれば、昨年入ってきた捕手のバッティングを活かすために、近藤を左翼に廻したとのことであった。見れば、近藤は左翼に頑張って、黙々と一心不乱にノックを受けていた。しかし、私には迷いがあった。チームの建て直しや、打撃陣の強化のためであるとはいっても、遊撃から捕手に、それから左翼にと、そうそうポジションを変えていいものか、と疑いを懷いたことであった。近藤が卒業を間近に控えていただけに、気持ちの上でも領けられないものがあった。私のこの疑問に、飛田さんは『一つのポジションに精魂を打ち込んで、そのポジションを体得した大学選手なら、どこをやらせても、一日か二日の練習でやってのけるものですよ』と手軽に説明してくれた。或る一つのポジションから出発して、それを真摯に深く掘り下げてゆくと、他のポジションと繋がるところの共通の奥義に到達する。それを地上でこそ、遊撃とか、捕手とか左翼とかというように相互に違った地点でであっても、その各個の地点から、それを深く掘り下げてゆくと、必ずや他の地点からも通ずる共通の地下水に到達するようなものである。ひとたび、この地下水に到達するために精進をした者なら、その修行の過程で会得した心構えを、他のポジションのどこにでも当て嵌めて、一人前以上の仕事ができるということであったと思う。同じことは、法学教育についてもいい得ることである。……大教室での講義は、多数講義としての長所もないわけではないが、他面、重大な欠陥もある。数百人の学生の誰にでも一応当てはまる講義でなくてはならないが、その数百人の誰にでもピッタリと当ては

まる講義ではないからである。したがって多数講義に出る学生は、講義自体が自分自身にとっては中途半端なものであることを、先ず充分に弁えておかななくてはならない。いわば教授の大教室における講義は、ハーフメイドでこれをピッタリと自分に合わせて、自分のものとする仕事が学生各自の手に残されている…。色々な事例を、教授の指導の下に、学生たちが語り合い考え合い議論したり反省したりしているうちに、法律的なものの考え方が、自ずから身について来るし、結論も静かに浮き上がって来るということになる。一つ一つの事例は部分的であるが、一つの事例を通して根底深く掘り下げてゆく、その法学的トレーニングの過程において修得した知識こそ、本当にその学生の身についたものである。…卒業後、大学で全く習わなかった未知の問題にぶつかっても、これを処理するための基礎的な役割を充分に果たし得るものである。民法第何条かを忘れても、身につけた法学的な素養は、年とともに益々磨きがかけて行くことであろう。この意味で、飛田さんの教えは、法学教育の上にも、人間修行の上にも、まことに興味深い暗示を与えたものである。

⑩-3 優勝の陰にあるもの

1. 満塁ホームー以上のもの

昭和22年秋のリーグ戦では10戦して2勝8敗、勝率で東大の後塵を拝し、野球部として史上初の最下位で、同年春のリーグ戦で慶応と優勝を争い、またその前年21年秋のリーグ戦には優勝して、栄えある初の実業団杯に輝いた早稲田にしてみれば、まことに面目丸潰れで、弁解の余地の無い惨敗というほかはなかった。……いずれにしても、この惨敗から立ち上がるために、野球部は、明春のリーグ戦に備えて、12月20日から小田原で合宿練習をし、1月1日からは2週間の四国遠征で仕上げをする事とした。戦後の食糧事情や交通事情など、今日では想像も出来ない悪条件を克服しての合宿練習であり、地方遠征であった。私は、その練習開始にあたって、全部員を集めて話し合った。「秋は日頃の錬磨が実を結ばず、不幸にして六位にはなったが、たとえ六位になっても、早稲田は腐っても鯛でなくてはならない。早稲田の六位は早稲田の匂いのする六位でなくてはならない。私たちは今こそ、踏みにじられても踏みにじられても、育っていく雑草の強さを学ぶべきである」と。かくして、その第一回戦の相手チームはノン・プロの強豪オール徳島であった。…このチームは直前の暮に、明治を破っており、土地の人気は素晴らしく『早稲田何するものぞ』と、球場は超満員。お屠蘇気分も手伝ってオール徳島への声援はものすごく、その熱狂ぶりは試合前から頂点に達していた。

試合は午後一時半早稲田の先攻で開始された。

ところが、試合が始まってみると、戦前の予想は全くはずれた。

…早稲田は野見山、松本、蔭山、石井、荒川などの活躍で初回に5本の長短打で大量6点をあげてしまった。そして二回にも、さらに6点を追加するに至っては、スタンドの徳島ファンは唖然として、もはや試合の興味を失ってしまったようであった。

その頃からのことである。チェンジになって、早稲田が守備につき投手がプレー前の投球を始めると、捕手の山下（臣司：日大三中）を目がけてスタンドから、蜜柑が投げつけられるようになった。それは回を追うごとに、類は友を呼んで次々と投げつけられるようになった。期待を裏切られたオール徳島に対する不満や憤りの、はけ口ということでもあったろうか。ここで山下がこれを投げ返せば『神宮球場のリング事件』の二の舞となったであろう。ところが山下の態度はまことに見事で、全く平常と変わりなく、投手からの球を受け、そしてプレーがかかると、身の回りに転がっている蜜柑を両手で静かにかき集めて、控え選手を呼んで早稲田のベンチの裏に、そっと捨てさせていた。その素振りは、実に自然で、純真で、スタンド・プレー的な所は微塵もなかった。毎回、この山下の素振りを見た徳島ファンもさすがに気が差したか、いつしか蜜柑を投げなくなった。

…試合が終わって宿に引き揚げてきたところで、私は例によって、ユニフォームのままの泥まみれの選手を一室にあつめて、その日の試合の感想を話した。「強豪オール徳島に快勝したことは、暮からの練習の賜であって、まことに嬉しいことではあるが、それにもまして称讃されなくてはならないのは、あの山下の蜜柑集めのプレーである。戦争による野球の空白時代があって、練習や試合から遠ざかっていたので、私たちの野球は、技術的には戦前に及ばないかも知れないが、観衆から蜜柑を投げつけられても、球場を乱闘の巷としなかったばかりでなく、最高学府に学んでいる者の野球の在り方を、そして人間修行としての野球を、はっきり示した点では山下のプレーは、正に満塁ホームー以上の価値あるものと云うことができよう」。

この合宿と各地への転戦は、終戦後の特有の難行苦行ではあったが、選手たちはそれを通して心の上にも、技の上にも、一段と自信をもったようで、冬来たりなば春遠からじの気持ちで、春のシーズンを待っていた。かくしてリーグ戦の成績は、一般の予想を覆して、9勝4敗1分で見事優勝した。毎日新聞の小野三千磨氏は、「昨秋の最下位は今春の最上位」と評されていたが、私たちは、華やかな優勝の陰には、このような心の修練が積み重ねられていたことを看過してはならない。（つづく）

HP 便り その5

ホームページはいかに最新のニュースを皆さんにお伝えするか命です。目黒稲門会HPはそのために月の中旬と月末の二回、更新するように努めています。ですから、その頃にHPをご覧になって頂けると新しい記事が掲載されていることになります。

皆さんに参加して頂けるイベントのお知らせなどもありますので、是非ご覧下さい。

時々の更新の内容はトップページの中央右にある「What's new」のブログに記載してありますし、新しい情報のある場所は「NEW」「UP」という印がキラキラ輝いています。

何かに参加したい、もっと特定の活動のことを知りたいという方は、どうぞ目黒稲門会の代表メールアドレスにご遠慮なく連絡ください。喜んでお答えさせていただきます。 広報HP担当 中西千可子

皆様のご寄稿をお待ちしています。

次号から「会員の広場」を設けたいと思います。

「エッセイ」・「紀行文」・「珍しい話」・「耳よりな話」・「思い出話」・「体験談」・「好奇心を煽る話」・「話題になる話」などなど何でも結構です。どうぞ気軽にお寄せ下さい。

(但し、政治色・宗教色の強いもの、他人のプライバシー・人権に関わるものなどはご遠慮下さい。)

字数：400字～800字程度(横23字で行替えします)

(写真1枚挿入出来ます)

様式：手書き又はワープロ・PCでプリント

原稿締切日：06年1/6、4/7、7/7です。

送り先：表題に記載の事務局(吉田博行)宛

部会案内一覧

詳細は本誌の各部会報告をご覧いただき、興味をお持ちの部会にお気軽にご連絡下さい 05年10月現在

部会名	部長 担当幹事	連絡先 電話/Fax	参加人数	当日会費 (年会費ナシ)	活動概要
囲碁	保井 正		10数名	500円	毎月1回(下目黒住区センター)
カラオケ	海口昭治		10数名	3,000円 女性1,000円	毎月 第二金曜 午後4～7時 (コートダジュール学芸大学店B1)
グルメ	海沼美智子		20～30名	6,000円～ 10,000円	年3回程度 リーズナブルな金額 と雰囲気・味の良い店を厳選
ゴルフ	大野利幸		20～30名	25,000円程度	年2回 春秋、別途 秋に総長杯
ダンス	小川裕正			3,000円	目下休会中
麻雀	松尾洋一		10数名	3,000円	年4回 西小山クラブ 他区稲門 会との連合親睦大会もある
美術・歴史鑑賞	八幡和二郎		10数名	その都度	年数回
旅行	井村正陽		10～20名	その都度	年2回 春秋
ユース23	石川智子		数名	5,000円	年数回 土曜夜 若手・準若手
三土会	土川俊雄		10～15名	5,000円	毎月 第三土曜 午後6～9時
広報HP	中西千可子	cメール URL	mcguro@tomonkai.nifty.com http://homepage3.nifty.com/mc96tomon-waseda/		

編集後記

会報編集は、第1月の中旬に行う企画会議と執筆依頼からスタートします。約1ヶ月後の第2月の中旬に原稿を締め切り、中旬の編集会議で割付、デザインを決めてゲラ刷りを依頼します。それから第3月の初旬から中旬にかけて入念に初校、再校、校了を行い、下旬に完成品を編集委員が総力を挙げて封筒詰め作業をやって、郵便局まで持ち込んで終了となります。

当会報は、年4回発行を目処としていますので一年間で全く手空きの月はありません。

でも原稿依頼から締め切りまでの約1ヶ月は最も解放感を味わえるひと時であります。(しかしこの期間にも担当箇所の原稿書きをせねばならぬ編集委員も居られるのですが…)

そして、発送作業終えた後の全員の顔は、自然とほころび本当に爽やかな笑顔となります。なんと心地良い事か。(外岡 記)